



# 四谷のお岩



川崎ゆきお

「四谷のお岩ですが」 玄関先で彼女はそう名乗った。 妖怪博士は土間にある椅子を指さした。座れという意味だ。 四谷怪談のお岩と違うところは日本髪ではなく、長い髪をだらりと垂らしている。和服ではなく、腕が二本ほど入りそうな袖のゆったりとした長いワンピースだ。草履ではなく、浅い靴を履いている。 このお岩さんなら、町中を歩けるだろう。左目に眼帯をかけている。 土間の椅子にお岩は座る。妖怪博士は廊下に座布団を敷き、尻だけをそこに乗せ、土間に足を置いている。縁側に座っているような感じだ。危ない客が多いので、訪問者は、ここで迎え入れている。「お岩稲荷では成仏できません。納得できません。それで、こうしてさまよっています。でも、お岩稲荷に願を掛けた人には、崇るようなことはしません。しかし、毒薬を飲まされ、髪の毛が抜け、生え際が後退し、眼が腫れた状態を見ると、恨ましく思います」「恨ましく思うのは、夫の田宮伊右衛門をか」「いいえ、私を演じている役者さんや、それを作っている人たちです。監督やカメラマンに対してです。でもお岩稲荷に来て、安全祈願をされているので、約束を反故にできません」「それは分かったが、どうしてここに」「成仏したいのです」「しかし私は妖怪博士で、心霊関係の専門ではない。それなら、お祓いしてもらうのがよろしいかと」「何度もしてもらいました。しかし効きません。もう私は人間ではなく、幽霊でもなく、妖怪になってしまったのです。だから、あなたを訪ねて、ここに来ました。どうか私を成仏、いえ、仏になろうというのではありません。この世に出て来れないように、上げてください」「上げる?」「極楽でも地獄でもかまいません。上げられなければ、落としてください、地の底に。もう疲れしました。何百年もこの世にとどまっているのですから。それに最近、四谷のお岩と名乗っても、知名度も落ち、それは誰だと聞かれたりします」「そうですか」「私はもう人の霊ではなく、妖怪変化になっております。妖怪退治は、あなたの専門でしょう。それで、自首しにきました。どうか退治を」「ご自身では立ち去れないのですかな」「はい。消えることができません。それがもう辛くて辛くて」「だが、私は妖怪研究家で、術者ではない。だから、相談に乗れる程度です」「では、どうすればいいのですか」「この世への恨みはまだありますか」「いいえ、もうそんなものは忘れました」「未練がなければ、姿を現す必要はない。なのに、こうして出てきておる。それが苦しいのですな」「はい、江戸の昔から、明治大正、そして昭和までは、まだ恨み辛みはありました。しかし、平成のこの時代、もうどうでもよくなったのです」 妖怪博士はお岩をじっと見ている。「その眼帯は」「腫れているものですから」「それは災難でしたなあ」「はい」「それで、今のお住まいは」「ありません。四谷周辺にはもう住めません」「住むといっても、霊なので、衣食住の心配はないと思いますが」「そうです。でも、この世に出てくるときは、それなりの服装をします」「はい、了解いたしました」「長い、霊生活、疲れ果てました」「少し、話してもいいですか」「はい」「お岩さんなどいなかったのです」「はあ?」「田宮伊右衛門に毒を盛られた女性など、実在しなかったということです」「はあ……でも夫の指図で按摩の宅悦が、毒を」「だから、お引き取りください」「いえ、お岩様は有名な幽霊で」「お気持ちは分かりますが、存在しない架空人物の霊は、根本的なところで間違っているのです」「間違いでしたか」「はい」「それは、失礼しました」「よく聞き分けられた。これで、あなたは成仏するでしょう」 妖怪博士は玄関戸を指さした。お帰りくださいという意味だ。 お岩は、立ち上がった。 了